

第1回

先端医療を地域から世界へ

AOI 国際病院



循環器内科部長 兼 不整脈先端治療センター長
平尾見三 先生



心血管治療センター 副センター長
川島朋之 先生



不整脈先端治療センター 副センター長
前田真吾 先生



医療法人社団葵会 AOI 国際病院

〒210-0822 神奈川県川崎市川崎区田町 2-9-1
TEL: 044-277-5511 (代表)
<https://www.aoikai.jp/aoiuniversalhospital/>

2013年に新規開院した川崎南部病院は2015年にAOI国際病院と名称を変え、地域医療へ貢献すべく新たな一歩を踏み出した。AOI国際病院がある川崎市は京浜工業地帯の中心的都市の1つだが、古くから関東の厄除け三大師として数えられる古刹・川崎大師もある。AOI国際病院は新旧融合したこの地域に密着した病院である。それと同時に、政府の医療特区構想である神奈川県の臨海フロンティア地区構想に合わせて、近未来の医療を担うべく準備を進めている。もちろん、最新の血管撮影装置やハイブリッド手術室などの整備にも抜かりはない。そして、一般急性期から緩和ケア期の看取りまでという自己完結型の病院づくりを目標に掲げ、日々の診療に邁進している。

医療特区に存在感を放つ若い病院

「われわれが循環器内科を立ち上げたのは2019年の4月なので、まだ2年半弱しか経っていないのです」と、循環器内科部長の平尾氏は言う。不整脈治療のエキスパートである氏は東京医科歯科大学で26年にわたって教鞭をとり、2019年4月にこのAOI国際病院に赴任した。大学とともに不整脈治療にあっていたメンバーを中心に、現在、常勤医師7名、非常勤医師3名という少数精鋭で心臓の先端診療を行っている。「非常勤の先生方は不整脈の大家ばかりなので、治療の質は大学病院並みと言えます」と、氏は胸を張る。

AOI国際病院の大きな特徴といえば、その立地が国家戦略特区・国際戦略総合特区・特定都市再生緊急整備地域に指定されているエリア（キングスカイフロント）に最も近い総合病院であるという点だ。この特区には先端技術を持つ企業が数多く誘致されており、その地の利を活かしてAOI国際病院は、さまざまな医療の最先端技術をいち早く取り入れることができる。「近くにある一流企業の先端技術を、当院から地域に還元していきたいですね」と、平尾氏は意気込みを語る。

平尾氏が循環器内科を立ち上げてからの症例数を見ると、1年目でPCIが約150件、アブレーションが約120件であり、これはもともと地域のニーズがそれくらいあったという表れであろう。また病診連携・病病連携も努力の甲斐あって、2020年にはPCIは約180件、アブレーションは約150件という推移を見せており、病院の地域からの認知度も上がっているようだ。また、開胸手術を30件経験しなければ行えないICD（植え込み型除細動器）植え込み手術も、その条件をクリアして実施できるようになった。「まだ若い病院なので、認知度を高めていくことは課題の一つです。個人的に、大学では経験しなかったような地域との連携など、刺激的なことが多いですね」と平尾氏。センターのさらなる成長を目指して、活動意欲を高めている。

病院としても循環器治療に力を入れていて、循環器専門医研修施設、CVIT研修関連施設、不整脈専門医研修施設の認定を取得した。これによって今後新たな教育も可能となり、心臓治療のほぼすべてをAOI国際病院内で行えるようになった。病院を運営している葵会も、勤

務する医師たちが高いモチベーションを保つための環境整備に力を入れており、「ゆくゆくは神奈川県下でも有数の病院になるように、また、若手がここで働きたいと希望するような病院を目指しています」と話す平尾氏の目標は、達成に向けて着実に進んでいるようだ。

アブレーションにもPCIにも適した 使い勝手の良さ

AOI国際病院に導入された島津製作所製の最新鋭血管撮影装置であるTriniasは平尾氏をはじめ、前田氏、川島氏も一押しの機器である。不整脈治療チームの前田氏はアブレーションで、虚血を担う川島氏はPCI・EVTでTriniasを活用している。

年間150件超のアブレーション治療を行う不整脈先端治療センターは、大型装置をはじめ、各社の最新バージョンの機器がすべて揃っていることが特徴だ。大学病院でしかできない特殊な手技以外は、すべてこのセンターでできてしまう。前田氏は、アブレーションでは透視と同じ角度で冠動脈を造影し、その位置を確認しておくことが重要だと言う。Triniasは管球やFPDを含めCアームがコンパクトなためアブレーション中のポジションが取りやすく、とりわけ新たに導入したバイプレーン型はCアーム動作がスムーズだと付け加えた。

不整脈先端治療センターで最近増えてきたのが、冷凍凝固で治療するクライオアブレーションである。この治療は肺静脈からの造影剤の漏れの確認が必須なので、低線量でもきれいな造影が得られるTriniasは非常に有用なのだそう。また前田氏は「心房細動の治療では3Dマッピングがメインです。カテーテルの移動や中隔穿刺にはどうしても透視が必要なので、少ない造影剤で、かつ短時間できれいな画像が得られるというのは非常に大きなメリットと言えます」と、Triniasの利点をあげた。

心血管治療センターで虚血を担当する川島氏も、Triniasを非常に気に入っている。氏が赴任したときに病院に導入されていた装置は、EVT領域の血管の描出能が低かったそう。前任の施設でTriniasを使っていた川島氏は、カテ室をランクアップさせたいという思いで希望を出し、それが叶った。「Triniasは本当に使いやすい装置ですよ。動きはきびきびしているし、造影剤が少なく済むので、被ばく線量も少なく抑えつつ施行できる



のです。当センターに導入されたのはパイプライン型ですから、手技時間も短縮できて、安全かつ迅速に治療できます」と川島氏。最近のステントは非常に薄くなっているが、Triniasなら視認性に全く問題はない。特にSCORE StentViewを用いれば、マーカーの位置決めやKBTの際に、枝側の対側にあるステントの状況も確認できる。

EVT領域では、SCORE MAPとSCORE Chaseが非常に有用だという。SCORE MAPで得られた血管撮影像はスムーズなワイヤー操作と造影剤の低減というメリットをもたらし、SCORE Chaseは血管を連続的に撮って血管の全体像を一見できる画像を患者さんに呈示できるので、患者さんに分かりやすい説明ができ、喜ばれるそうだ。

不整脈患者は増加の一途を辿っている

日本でアブレーション治療を受けている患者さんは、年間10万人に上る。加えて毎年1万人は増えていくと言われる。「30年前にアブレーション治療ができてから、治療数の伸びは本当に大きいのです」と、平尾氏は実感を含めて言う。東京医科歯科大学は不整脈に強い大学と

して知られているが、大学で最初に不整脈センターを設立したのが平尾氏なのである。不整脈に関して並外れた高い経験値を有している氏のセンター運営には隙がない。高いスキルを持つスタッフと協力しながら、川崎市南部を中心とする医療圏にインパクトを与え続けている。

AOI 国際病院が目指す循環器治療

「何はともあれ、まずは地域医療です」と平尾氏は言う。そしてその「地域」を広げつつ質を高め、全国津々浦々から紹介されるような病院づくりを氏は目指している。羽田に近いことから名付けられた国際病院という名前のおとり、海外の患者さんにも選ばれる病院になりたい。それが平尾氏の想いなのだ。この先症例数がさらに増えればメンバーの拡充も必要になるだろうし、医療特区の中の病院であることから、ライブシステムを利用した最新の医療システムの展示場になっていくということもあるかもしれない。日本の医療はアジアにおいて価値付けられているので、羽田空港の近くという地の利を活かすアイデアは斬新だ。成長のまったただ中にあるこの若き病院はエネルギーに満ちあふれている。